Column

エネルギーの源①

# 茨木のり子のメッセージ

千葉大学大学院工学研究科都市環境システムコース准教授
一般社団法人洸楓座 代表理事
佐藤 建吉

茨木のり子（詩人、1926～2006年）は、昭和から21世紀初頭を生き、私たちに強いメッセージを残した。彼女は、私の郷里でもある山形県鶴岡市の海の見える墓所（写真）に、愛夫とともに眠っている。昨年、その浄禅寺を訪ねた。いま、あらゆる面で持続可能性が叫ばれているが、永遠の眠りと呼ばれるように、死者こそが持続可能な存在である。

その茨木のり子の生前の言葉は激しい。とくにここで挙げておきたい詩がある。『倚りかからず』で、思想、宗教、学問、そして権威にも倚りかかりたくないと述べ、倚りかかるとすれば、椅子の背もたれだけであるという。『自分の感受性くらい』では、さらに激しく、

・・・
自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ
・・・（前後略）

と叱咤している。

いずれも、「依存しないで、独自性をもって生きろ」との警告で、個の確立と自立を強く謳いあげている。これは詩歌の中での叙述であるが、私たちの現実の社会への警告とも読むことができる。

茨木は、また『わたしが一番きれいだったとき』で、戦時中というその時代への想いを、正直に語っている。これらは、彼女の感性が発したメッセージであり、時代を読み解いた作品である。

いま、私たちは、彼女のような個に根差した感性を持ち、さらに発信しているだろうか。個を大切にするあまり未来や社会全体について、考えることを避けてはいないだろうか。あまりにも近視眼的、経済重視になっていないだろうか。

エネルギーの選択において、私たちは、未来に悔いを残してはならない。茨木のコトバからは、エネルギーについての警告を読み取ることができる。つまり、前例主義や従来方式に固執せず、真に持続可能な方法を、未来を先取りすることを、自身の感受性や考えで選択すべしという意図である。

私は再生可能エネルギーを基盤とした社会に切り替えるべきと主張している。それは地元資源の活用によるエネルギーの国産化と地産地消、エネルギー・セキュリティの確保、新型地場産業の隆盛が、「地方復権による日本再生」を達成するための真のイノベーションであると考えるからである。

この連載で私は、エネルギーばかりでなく、社会における文化や歴史、工学の歴史などについて、多面的な視点から語り継いでいきたい。

茨木のり子が眠る三浦家の墓

『倚りかからず』 茨木のり子

もはや
できあいの思想には倚りかかりたくない
もはや
できあいの宗教には倚りかかりたくない
もはや
できあいの学問には倚りかかりたくない
もはや
いかなる権威にも倚りかかりたくない
ながく生きて
心底学んだのはそれぐらい
じぶんの耳目
じぶんの二本足のみで立っていて
なに不都合のことやある
倚りかかるとすれば
それは
椅子の背もたれだけ